

横井小楠における海外知識の受容

田 海 秀 穂

はじめに

幕末期の思想家横井小楠（一八〇九—一八六九）は、前福井藩主で幕府の政事總裁に就任した松平春嶽（一八二八—一八九〇）の政治顧問として、「文久の幕政改革」（一八六二）に取り組み、舊來の幕藩體制にかわる新たな政治體制の構築を目指した。

當時、ペリー來航を契機として歐米諸國の動向に對する關心が急速に高まり、魏源『海國圖志』などの海外地理書・歴史書が志士・學者の間で競って讀まれるようになっていた。小楠の經世思想にも、これらの書物からの影響が大きく作用したと考えられる。

本稿は、小楠における海外知識の受容が彼の經世思想に如何なる影響を與えたかを考察するものである。そのため本稿では、小楠の論考・書簡中の海外知識の記述に着目し、それらと『海國圖志』などの書物に見える記述とを照らし合わせながら考察をすすめていくこととする。

また從來の多くの研究は、小楠が得た海外知識の源泉として、第

一に『海國圖志』を挙げているが、本稿では『海國圖志』以外の文献についても具體的な検討を加えてみたい。

なお本稿で引用する横井小楠の文章は、特に明記していない場合、山崎正董編『横井小楠』下巻 遺稿篇（東大出版會、續日本史籍協會叢書『横井小楠關係史料一・二』所収、一九七七年。「遺稿篇」と略。）による。また原文の引用に際しては、片かなや變體がなは平がなに改め、適宜段落を設けて、句讀點・濁點・括弧等を附し、原文割注は「」で示した。原文のルビと區別するため、筆者が附したルビは、（ ）で表記した。漢文は、原則として讀み下し文にし、字體は、舊字體を用い、異體字の類は正字に改めた。

一 小楠における『鎖國論』の受容

「讀鎖國論」（『遺稿篇』、六九二—六九三頁）は、小楠が江戸遊學中の天保十年（一八三九）ころ、エンゲルベルト・ケンペル原著・志筑忠雄譯『鎖國論』を讀み、著者ケンペルの鎖國政策肯定論に共鳴して著した未完の漢文論考である。

ちなみに小楠の江戸遊學中の見聞録である「遊學雜誌」にも「江戸都城の廣大なる西洋人世界第一と唱る由、承りしに、志筑忠雄「忠雄享和年間人」が翻譯せし鎖國論「西洋人エンゲルトケンフルと云人の著」を讀むに世界の都城江戸より大なる者有り。」で始まる二千五百字餘の記述（『遺稿篇』八〇九―八一二頁）が存在する。右は『鎖國論』の讀書ノートでもいふべきものであるが、『鎖國論』に對する小楠の見解は、未完ながら「讀鎖國論」の中にもっともよく述べられていると考えられるので、まず「讀鎖國論」を考察の對象としたい。

（一）『鎖國論』について

はじめに小楠が讀んだケンペルの『鎖國論』の由來とその鎖國肯定論について考察する。

1 『鎖國論』の由來

ケンペル（一六五二―一七二六）は、ヨーロッパにおける最大にして最後の宗教戦争であるドイツ三十年戦争（一六一八―一六四八）が終結した三年後の一六五一年、戦争により荒廢したドイツの北部レムゴーに生まれた。やがて彼は、長崎オランダ商館附醫員として、元祿三年（一六九〇）から元祿五年（一六九二）までの約二年間、日本に滞在した。當時の日本は、五代將軍徳川綱吉（一六四六―一七〇九）の治世下にあり、まさに元祿の太平を謳歌した時代である。

『鎖國論』はケンペルが歸國後に著した論文をもとに、彼の死後出版された『日本誌』（オランダ語版、一七三三年）の附録第六章

を長崎通詞で蘭學者の志筑忠雄（一七六〇―一八〇六）が享和元年（一八〇一）に抄譯したものである。¹⁾「鎖國」という語は、志筑がケンペルの論文を『鎖國論』と題したことに由來する。

志筑の譯本は、幕末までに多くの寫本が流布したが、嘉永三年（一八五〇）に國學者黒澤翁滿（一七九五―一八五九）が『異人恐怖傳』²⁾と改題して出版した。本稿ではこの黒澤の『異人恐怖傳』を底本として用いることとする。

2 ケンペルの鎖國肯定論

『鎖國論』におけるケンペルの主張をまとめてみよう。

ケンペルは『鎖國論』の冒頭で「我等が住む地球は、かくばかり狭小なる世界なるもの（中略）同交通の道は、人間の宜くあるべき所」（『異人恐怖傳』一八二頁）であるとして、鎖國制度は原理的に見れば、天理に背くものであると述べるが、各論に及ぶと、相互交流の道がかえって對立抗争の道へと轉化し、必ずしも國々に平和をもたらさない悲惨な結果を招來する場合もあると、次のように指摘する。

造化もし各地に恵むに、一切有用の具をもてして、住民全く境域の内に満足して、露ばかりも他人固有の地を犯す心を生ずるの道理あるべからず。（中略）然らば相殺害し相槍掠し、全國を轉じて荒涼となし、無人の境となし、さしも高名なる宮殿寺觀を破て灰燼となし、堆塊となすの類、其外許多の怖しき大變、怖しき兵亂、さては慘劇不仁の事、併呑侵奪の業のごとき、人間一切知る事なくてこそあるべけれ。（同前、一八五頁）

もし造物主の恵みによつて、各々の民が交わることなく、各々が

自足して域内の生活を豊かに送ることができれば、悲惨な戦亂の慘禍を知らずに平和の裡に生活することが出来るはずであるという。この記述からドイツ三十年戦争によつて疲弊した祖國に對するケンペルの思いを読み取ることができよう。

ケンペルは日本について、東方隔絶の地に位置する地理的環境、勇敢な民族性、物産の豊富さ・技藝の優秀性、さらにポルトガルとの關係からキリシタン禁止に至つた歴史的背景を考えれば、日本には鎖國を肯定すべき特別な條件が備わっていると、徳川幕府の鎖國政策を肯定・贊美したのである。ケンペルはいう。

爰に最も慶賀すべきは、日本人の一流にてぞ有りける。其の國檻の内に在て、太平の澤を受けて、異國の人と通商通交せざるをもて患とせず。如何となれば、其の地勢有福にして、是等の事なくとも堪るがゆゑなり。(同前)

ケンペルは、日本滞在中の二年間、戦亂のない平和な日々を體驗し、日本という極東の地に造化の恵みの存在を實感したことが窺える。

(二) 小楠の「讀鎖國論」と鎖國攘夷主義

以上の考察をふまえて、ここからは小楠がケンペルの『鎖國論』に對する所見として書かれた『讀鎖國論』の思想的特色と小楠の鎖國攘夷論について検討する。

1 「讀鎖國論」の思想的特色

ケンペルの論を受けて小楠は、『檢夫爾の『鎖國論』の如きは、我が山海の險絶を窺ひ、我が士氣の剛鋭を見、我が土地に産する所

の百物の自足するを知り、而して極めて我が鎖國の卓越のみに服せり』(『遺稿篇』、六九二頁)と述べている。ここから小楠が『鎖國論』を西洋人ケンペルの日本贊美の書として受容したとする見方も成り立つ。

しかし小楠は、續けて次のように述べている。

泰西諸州、大抵襟帯相ひ接すること、猶ほ我が七道の如く、交はずしては、互ひに生を爲すことを得ず。是れ彼の我と球を同じくするも地を殊にする所以なり。故に彼に在りては、通を開くを道と爲し、我に在りては、鎖を閉ずるを道と爲す。各々其の宜しき所を得て、而る後に之を天に順ふと謂ふ。夫れ民の頼りて以て生と爲す所の者は天なり。天の賦する所、既に地を殊にすれば、則ち治法も亦た殊にせざるを得ず。是れ檢夫爾の論ずる所にして、各々以て斯の民を安んずる所の道に非ざらんや。(『遺稿篇』、六九二―六九三頁)

この小楠の論は、西洋の國々と日本とは同じ地球上に存在しながら地を殊にするものであり、西洋が開國を道とし、日本が鎖國を道と定めたのも、各々その宜しき所を得たことによる。「天に順ふ」とは、そのことをいうのだ。民の生きる據り所は天であり、天が與えて地を殊にすれば、政治の在り方も殊にせざるをえないのである。これがケンペルの論じた最も肝心なところであり、そこに各々の民を安んずる道が示されているのではないかと要約することができよう。

以上の小楠の主張から、西洋と日本との間には別々の道が存在することを認め、それにより彼我の關係を理解しようとする思想の萌芽を読み取ることができると考えられる。したがって小楠が『鎖國

論』について單に日本を贊美し、又は萬國における日本の優位性を主張する文献として受容したのでないかと解することができよう。

2 小楠の鎖國攘夷論の變容

さて當時の小楠は、鎖國攘夷主義を標榜していた。たとえばペリー來航後の嘉永六年（一八五三）八月、小楠は藤田東湖（一八〇六一八五五）に宛てた書狀の一節で、次のような激烈な攘夷論を主張している。

此時に於て列藩總て老公様（徳川齊昭）の尊意を奉じ、二百年太平因循の弊政を一時に撤回し、鼓動作新大に士氣を振興し、江戸を必死の戰場と定め、夷賊を齏粉に致し、我が神州之正氣を天地の間に明に示さずんばあるべからず」（『遺稿篇』、二〇四頁）

しかし小楠は、同年十月頃、ロシア使節プチャーチン（一八〇三—一八八三）との應接を命じられた幕府外國奉行川路聖謨（一八〇一—一八六一）に宛てた論策「夷虜應接大意」において、「我は戦闘必死を宗とし天地の大義を奉じて彼に應接するの道、今日の一義にあらずや」（『遺稿篇』、十四頁）とする攘夷主義を唱えつつ、次のような外交原則を提唱した。

我が國の外夷に處するの國是たるや、有道の國は通信を許し無道の國は拒絶するの二つ也。有道無道を分たず一切拒絶するは天地公共の實理に暗して、遂に信義を萬國に失ふに至るもの必然の理也。（同前、十一頁）

ここで注目すべきは、小楠が有道・無道における「道」を日本一國だけの特殊な概念ではなく、萬國に通用する普遍的な概念として

捉えたことである。

「鎖國論」の思想的特色を検討する中で指摘したように、小楠には、西洋と日本には相互に「道」が存在することを認め、それにより彼らの關係を理解しようとする思想の萌芽が見られたが、「夷虜應接大意」に至って、さらに兩者の「道」を統合する普遍的な「道」の存在を見出したと思われる。これは小楠が鎖國攘夷主義から開國論へと轉化していく端緒となつたものといえよう。

二 小楠の開國論への轉換と西洋觀の形成

次に小楠が開國論へ轉換する契機となつた『海國圖志』の講習・討論の意義を考察した後、小楠の「安政三年十二月二十一日附け、村田巳三郎宛書簡」（『遺稿篇』、二四一—二四六頁、以下「村田宛書簡」という。）を重點に取り上げ、海外知識が小楠の經世論の中でどのように受容されたかを検討する。はじめに『海國圖志』の由來を簡單に述べておきたい。

『海國圖志』はアヘン戦争後の清末の中國で出版された世界地理書である。英國人ヒュー・マレーの原著『地理全書』を林則徐（一七八五—一八五〇）が袁德輝等に命じて翻譯させた『四州志』をもとに、魏源（一七九四—一八五六）が編譯し、道光二十二年（一八四二）五十卷、同二十七年（一八四七）増補全六〇卷、咸豐二年（一八五二）増補全百卷として出版された。漢文の世界地理書として、當時質量共に最も充實した書物であつたから、我國に初めて傳えられた嘉永四年（一八五二）以來、嘉永・安政年間を通じて、多くの和譯本が出され、小楠をはじめ佐久間象山（一八一—

一八六四)、吉田松陰(二八三〇—一八五九)、安井息軒(二七九九—一八七六)、橋本左内(一八三四—一八五九)など海外事情に關心のある者に廣く讀まれた。

(一)『海國圖志』の講習・討論

さて小楠がはじめて『海國圖志』を讀んだのは、安政二年(一八五五)、弟子の内藤泰吉(一八二八—一九一一)との講習・討論を通してであつた。内藤はその時の模様を次のように回想している。

安政二年二十八歳のとき先生(小楠)は海國圖説により、愈々開國論を主張されることになつた。俺を相手に毎日談が始まる。晝飯を忘れたことが百日も續いた。先生は兵法で談される。俺は醫術を以て之に應じ、大いに啓發する處があつた。此の對談以來、先生の學意が大いに判つて來た。(内藤泰吉述、内藤游編『北窗閑話』、一九二七年)

ここからは『海國圖志』の解釋をめぐり、小楠と内藤との間に長期間にわたつて激しい議論が展開されたことが想像される。

ここでは、内藤が回想の中で「先生は兵法で談される」という小楠の「兵法」とは何を意味するのか、少しく検討を加えてみたい。

1 小楠の「兵法」について

内藤は、中山至謙・野中宗育と共に、當時熊本城下相撲町にあつた小楠塾に寄宿しながら、西洋醫學塾に通學していた。彼は「嘉永五年二十五歳のとき、先生(小楠)の紹介で寺倉秋堤氏の門に出入し、醫學を修むることになつた」(同前)と述べている。

花立三郎『横井小楠の弟子たち』(藤原書店、二〇一三年、一九二頁)では、「三人の醫學生は小楠塾に寄宿して通學したのだから、小楠塾に歸つたら、小楠に報告し、お互いに情報をお互いつつ討論を重ねたに違いない」と述べて、小楠塾における小楠と弟子たちの間には、西洋の學問をめぐり日常的な情報交流と討論の場が存在したと推測している。その上で花立は、小楠の兵法の意味について、「いろいろかんがえてみるが、この兵法の内容を把握することはむづかしい」としながら、次のように述べている。

専門家について學ぶこと三年間の内藤の西洋醫學・醫術の合理主義、リアリズムに對して、和式兵法の上に『海國圖志』の兵法を練りあげたとしても、小楠の兵法が、はたして太刀打ちできたのであろうか。(中略)小楠が内藤に説伏され、どうしても敵せぬ内藤の議論のまゑに、小楠は翻然と十六年間積み重ねられた積年の疑問不明を開明できたのではないか。(同前、一九五—一九六頁)

このように花立は、小楠の「兵法」を古い「和式兵法」と解釋し、内藤との講習・討論を契機に古い攘夷主義からの脱却が圖られたとするのである。内藤の「俺は醫術を以て之に應じ、大いに啓發する處があつた」という句から、激しい攘夷論者であつた小楠が開國論に轉換したことについて、内藤の働きが大きかつたことが推測できよう。

卑見では、内藤が嘉永五年(一八五二)、寺倉秋堤の門に入るにあつたつて、小楠が彼に贈つた「内藤泰吉に告ぐる語」には、「西洋之書を讀むは第一彼諸國之治亂・興廢・政事・兵道及土風・人物に至る迄詳に研究し、天下の見聞を廣めずんばあるべからず。彼れ醫

書のみ讀むは俗醫の陋なり」(『遺稿篇』七二五頁)との一節があり、ここから小楠は、はやくから西洋の事情に對して強い關心を抱いていたことが窺われ、これも小楠の開國論への轉換を促した要因のひとつであったと考えられる。

2 小楠の讀んだ『海國圖志』の翻刻本

さて小楠は『海國圖志』のどの篇を讀んだのか。『海國圖志』のうち、我が國に受容されたのは、六十卷本と百卷本であるが、その中心をなすのは六十卷本であった。川路聖謨の盡力により幕府の許可が下りるや、嘉永七年(一八五四)から安政三年(一八五六)にかけて、わずか三年餘りで二十二種類もの翻刻が出版された。小楠自身が『海國圖志』に言及しているのは、「村田宛書簡」に、「近代翻刻海國圖志、アメリカ之部は其國志に因て著し候間、餘程明白に有之候へ共、魯西亞杯は殊の外大略にて事情を得不申事かと被存候事」(『遺稿篇』、二四三頁)という一箇所のみであり、それがどの翻刻本を指すものかを特定することは困難である。本稿では参照の便を考慮して、アメリカ篇の翻刻本には、廣瀬達譯『亞米利加總記』(嘉永七年、一八五四)を、ロシア篇には、大槻禎重譯『俄羅斯總記』(嘉永七年、一八五四)を用いることとする。⁴⁾

(二)「村田宛書簡」の検討

はじめに村田巳三郎(名は氏壽、一八二一—一八九九)について述べておきたい。

村田は、福井藩士として、藩主松平春嶽を助けて橋本左内とともに將軍繼嗣問題に奔走し、文久二年(一八六二)、春嶽が幕府の政

事總裁に就任すると、側近として活躍した。

小楠との關係では、安政四年(一八五六)、春嶽から小楠招聘の直命を受けて熊本に赴き、春嶽の内意を小楠にもたらしした。このとき春嶽は村田に對して、一昨年、藩校明道館を創建したものの教官に人材が乏しいこと、また御家門筆頭の家柄として、公邊(幕府)の爲に盡力する覺悟であるが、かかる重大時には相談できる人物がぜひとも必要であるとして、次のように小楠の招聘を命じたという。

其の人となりの事は此方にも毎々聞及、致承知居候所、先日同人より其方への來書、家老より差出候に附、篤と致披見候。其見識學力は是迄聞及たるよりも感心すべき事に覺ふ。ケ様の人物を相談人に頼み候てこそ初めて念願も成就致すべく、依之平四郎此表へ參吳候様致度、此使其方え申附候間、早速罷越可致心配候。(山崎正董『横井小楠傳』上卷、日新書院、一九四二年、二七八頁。)

春嶽が讀んで感心したという小楠から村田への來書が「村田宛書簡」(『遺稿篇』、二四一—二四六頁)にほかならない。

さて小楠が魏源編著『海國圖志』を讀んだことを契機に開國論に轉じたことは、前述のとおりであるが、それは同時に小楠の西洋觀の轉換を意味した。彼は安政二年(一八五五)九月に柳川藩家老立花壹岐(一八三一—一八八一)に宛てた書簡の中で次のように述べている。

近比、夷人之情實種々及吟味候處、中々以前一ト通り考候とは雲泥之相違にて實に恐敷事に御座候。勿論兵端さし迫り候筋とも存じ不申候。遠大深謀之所存にて、尤邊地杯を亂暴侵奪仕る者共にては決て無御座候」(『遺稿篇』、二二四頁)。

子安宣邦は、この立花宛書簡が「西洋諸國の國情についての認識が彼（小楠）に與えた問題の重さをよく物語っている。しかし注目すべきは、彼が『實に恐敷事』と見た歐米の實情が、ただ軍事力に表現されるかぎりでの國力ではないことである」（『理想』四一三號、理想社、一九六七年、八六頁）と指摘する。國力即軍事力ではないという小楠の思想は、小楠が「村田宛書簡」の中で佐久間象山を批判して述べた「修理（象山）は邪教を唱ふるにては無之候へ共、政事戦法一切、西洋之道明なりと唱へ、聖人の道は獨り易の一部のみ道理あると云ふと承る（中略）三代治道に熟せざる人は必ず西洋に流溺するは必然之勢にて」（『遺稿篇』、二四五頁）という言葉からも窺える。

以下、小楠の論述と『海國圖志』などの記述をもとに、アメリカ・イギリス・ロシアなどの歐米諸國の實情に對する小楠の理解について考察する。

1 政教一致の教法

小楠は嘉永五年（一八五二）に福井藩有志からの諮問に答えて書いた「學校問答書」の中では、藩校創設時期尚早論を力説していた。「村田宛書簡」で小楠は、明道館が早期に創設された事情は了解したとしながら、なお「今日に當りて尤も第一義と奉存候は此道之講明に有之」と述べている。ここで小楠のいう「此道之講明」とは、堯舜三代の道を目指すことにほかならないが、日本の現状を顧みれば、「一國三教之形御座候へ共、聖人之道は例の學者之弄びものと相成り、□□は全く荒唐無稽、些之條理無之、佛は愚夫愚婦を欺くのみにして、（中略）一國を擧げて全無宗旨の國體にて（後略）」（『遺

稿篇』、二四二頁）と歎じている。

これに反して、天主教が行われている西洋については、次のように評價している。

惣じて西洋諸國之事情、彼是に附て及吟味候へば、彼之天主教なるもの本より巨細之筋は知れ不申候へ共、我天文之頃渡候吉支丹とは雲泥之相違にて、其宗意たる天意に本き彝倫を主とし、扱教法を戒律といたし候。上は國主より下庶人に至る迄眞實に其戒律を遵守いたし、政教一途に行はれ候教法と相ひ聞こへ申し候。（『遺稿篇』、二四二―二四三頁）

小楠は西洋の天主教を日本の佛教や神道と同じには見えていない。「政教一途に行はれ候教法」であると定義しているところから、廣く人民を教導し、政治・社會を指導するより高次の倫理・道德の如きものと捉えたのではないかと考えられる。但し小楠が西洋のキリスト教を一括りに天主教としているのは、正確な理解ではない。狹義の意味における天主教は、中國においてはキリスト教カトリックの呼稱である。しかし『亞米利加總記』の記述に「英吉利に於て加特力教を奉ずるを禁ず。故に加特力教信仰の人三百人遷りて亞米利加に居住するなり」とあり、また『俄羅斯總記』にも「加特力天主教を崇ぶ。希臘教門に異ることなし。國都に在る教皇、大に權勢あり」としているところから見れば、小楠の理解に誤解が生じたとしても無理からぬことと考えられる。

2 ピョートルに對する評價

次に小楠のロシアに對する理解を中心に見てみよう。まず小楠は、初代ロシア皇帝ピョートル（一六七二―一七二五）を

高く評價し、次のように述べている。

魯西亞國を以て申候へば比達王中興より當時迄、殆ど二百年餘に至り其邦内政令能行治平相續き申候。國王年中之三之二は邦内を巡見し民間の利害政事之得失を察し、供人僅八十人に不過段に行安所と申も無之、行懸りに官舎或は民屋に止宿いたし、至て手輕事と承申候。(『遺稿篇』、一四三頁)

これは『俄羅斯總記』の次のような記述をふまえたものと考えられる。

比達王に至て聰明奇杰の人にして國都を離れ微行して巖士達覽アムステルダム等の處に在る船廠、火器局に遊び工藝を講習して國に旋て傳授し造製する所の火器、戰艦、反て他國に優れり。

ピョートルがオランダのアムステルダムに微行し、船大工の見習に扮して造船技術を學んだ逸話はかなり早い時期から廣く知られていた。たとえば箕作省吾(一八二一—一八四七)が著した『坤輿圖識補』^⑥には次のような記述がある。

俄羅斯の舊制、常に使命を外藩に發す。故を以て帝其裝を扮して、諸國の風を觀ると云。(中略)和蘭製の衣服を穿ち、名を伯德球・密加越羅夫と更め、身を匠作に扮して、名を工役名簿ミカドに著し、遂に其地の一小屋に僦居し、躬親ら食を作る。其本國政官と書牌を往來し、手自ら匠斧を操り、帆桅龍骨を斲る。

小楠は嘉永六年(一八五三)に村田氏壽ら福井藩有志に與えた『文武一途の説』^⑦の中で、古の聖賢の業について、次のように述べている。

古の聖賢は大英雄大豪傑にて在ましけり。禹の洪水を治め玉ふに手足たこを生ずる程に自ら働き、成湯・伊尹・文武・周公は、雨に浴し風に櫛り自干戈を執り天下の亂を鎮め玉ひしは、如何

なる英雄豪傑の業なるぞや。(『遺稿篇』八頁—一〇頁)

小楠は理想とする「堯舜三代」における聖賢の姿をピョートルの中に認めたのではないかと考えられる。

3 學政一致の學校制度

次にロシアにおける學校制度について、小楠が理解したところを檢討する。

小楠はロシアにおける學校制度について、ペテルブルクの大學校を擧げて、次のように述べている。

當時學校生員一萬に餘り、政事何ぞ變動之事總て學校に下し、衆論一決之上にあらざれば決して國王政官之所存にて行ひ候義は相成不申、將又執政大臣等要路之役人、是又一國之公論にて黜陟いたし候由、是等之事、總て其の宗旨之戒律之第一義と承り申し候。(『遺稿篇』、二四三頁)

以上の記述から、小楠は、「學校問答書」において「上は君公を始として大夫士の子弟に至る迄、暇まあれば打まじわりて學を講じ、或は人々身心の病痛を儆戒し、或は當時の人情政事之得失を討論し、(中略)徳義を養ひ知識を明にするを本意といたし、朝廷の講學と元より二途にて無之候」(『遺稿篇』五頁)と説いたような學政一致の政治がロシアでは現に行われていると理解し、特にロシア社會における政治と學校とを結びつけている天主教の役割に注目したことがわかる。

では小楠は、飜刻本のいかなる記述を讀んで、このような理解を得たのか。『俄羅斯總記』には、これに直接對應すると考えられる記述は見当たらない。強いていえば、「國王權を操る。公會議こと

に西國の尊貴を專にする者百二十人、得失を問ふて各をして意見を抒しむ」がそれにあたるのではないかと考えられる。

なお『訂正増譯采覽異言』に「^{トビトヒ}比 王、幼より聡明睿智にして、長じて寛仁大度なり。専ら民を安じ國を富すを以て務として(中略)政刑・服章・漚洩・軍旅、悉く皆講究討論してこれを新にせり」とあるのが、むしろ小楠の理解に近いと思われるが、小楠がそれを讀んだかは不明である。

4 ロシアの經濟と人民の生活

次に、ロシアの經濟と人民の状態に關する小楠の理解を見ておこう。

『俄羅斯總記』の記述から、ロシアの人民の生活を窺わせるものに「毎年關稅、田賦、雜稅を納む。共に計るに銀七千八百萬兩、(中略)國家の缺銀二萬兩なり」との記述があり、また「文武各官の俸祿甚だ薄く、多くは賄を受け法を枉ぐ」とある。さらにロシアの農奴制について言及したものととして、貴族が管轄する土地については「廣狹收稅の厚薄を問はず奴僕の多寡を以て大小を論ず。其の奴僕の最も多きは十三萬五千人に至る。(中略)一八一六年「清の嘉慶二十一年、我が文化十三年に當る」には、官の奴僕六百三十五萬三千人、人民の奴僕九百七十五萬七千人」という數字が紹介されている。なおアメリカの部の翻刻本『亞米利加總記』にも「亞米利加の民三百九十二萬三千三百二十一、其の内、奴と爲る者六十九萬五千六百五十五人」とあり、これは當時のアメリカにおける奴隸制に關する記述である。

これに對して小楠は、「民に取之年貢は十之一分にて有之、此外

は聊も取り不申、其故民間殷富いたし候」とし、經濟の道としては、産物を集め、工場を建て、交易を行い、その利益を以て國用にあて、「其の政事、全て其の教法に本き來り候故、上下人心趣向一致し邦内を擧げて異論無之由に承申候」(『遺稿篇』、二四三頁)と述べている。また「是等之政事、西洋諸國小異は有之候へ共、大抵皆同じ筋に相聞へ、魯西亞に次ではアメリカ新造之國にて別て盛大之由に承り申候」として、ロシアもアメリカも同じ西洋諸國として、その優れた點を理解していたことがわかる。

前述したように小楠は、アメリカの部の翻刻本と比べて「魯西亞杯は殊の外大略にて事情を得不申事かと被存候事」という感想を述べているが、小楠自身としても、當時の限定された情報範囲の中で、細部を正確に理解することは困難であつた。

5 ロシアにおける經書研究

「村田宛書簡」の後半部分で小楠は、ロシアが北京に留學生を派遣し、『書經』『詩經』『論語』三部のロシア語譯を國に持ち歸り、それをサント・ペテルブルグ大學において研究討議したことについて、「第一規模之廣大なる經綸之明齊なる修己治人・政教一致なる所に深く驚駭致し、(中略)堯舜之聖德に於ては誠に奇異の思ひをなし、其の奉る所之天主之教と全く符節を合し候と論決致し候。『遺稿篇』、二四四頁)と述べている。小楠はこの出來事を「距今三十五六年前の由」としているが、小楠の記述に合致する文獻は不明である。

横井時雄編『小楠遺稿』(民友社、一八八九年、一五九頁)は、この記述について「安政三年の書なり。此時先生(小楠)既に西洋

の事情概略を得たり。然れども未だ其の詳細を得るに由なし。故に「其政治宗教の關係及び魯西亞の國體を論ずる所或は異同有る所以なり」とする。また源了圓は、小楠のこのようなロシア認識について、「當時の日本人のロシアについての知識自體がほとんど空白に近かつたから、小楠は不十分な記事の中から自分の好ましいと思う記事を取上げ、足りない分は自分の想像力でふくらませて、自分の考えている理想の政治世界のイメージをロシアの中につくり上げたというべきであろう」(『横井小楠研究』、藤原書店、二〇一三年、一二八—一二九頁)と述べている。

源の指摘するとおり、當時の限定された情報量の中から、しかも西洋知識を専ら漢籍によつて得ていた小楠が、ロシアの政治・宗教について完全な理解を得ることは困難であつたといえよう。

但し、右の見解とは別に、『俄羅斯總記』を見ると、「天文館、算法館、法館、樂器館、技藝館、文學館を設く。又書院一所あり。内に中國と俄羅斯との書二千八百冊を藏す。是に於て文教も亦盛なり」とあり、おそらく小楠は、このような記述から、ロシアにおける文教の隆盛を想像しえたのではないかと考えられる。⁹⁾

三 小楠の幕政改革論

これまで見てきたように、小楠は『海國圖志』から海外知識を吸収したことで、西洋社會の力の源泉が軍事力のみによつて依拠しているのではなく、「堯舜三代」の治教にも匹敵する「政教一致の教法」が社會に根附いているからであるとして、舊來の夷狄觀を改めるに至つた。

小楠は、松平春嶽の政治顧問として、文久の幕政改革の理論・實踐の両面で指導的な役割を擔うこととなつた。本節では、改革の細かな経緯に關する記述は略し、小楠が海外知識の受容によつて形成した新たな西洋觀を幕政改革の構想の中にどのように生かしたかを探つてみたい。

(一) 文久の幕政改革

文久二年(一八六二)、朝廷及び雄藩との宥和を重視した幕府は、同年七月になつて、徳川慶喜(一八三七—一九一三)を將軍後見職に、春嶽を政事總裁職に任命した。中根雪江(一八〇七—一八七七)によれば、春嶽は、小楠の「是程迄切迫の御場合に相運び候事に候へば、兼而御評議の通り御出勤にて幕府之私を被捨、是迄之御非政を被改候様御十分に被仰立、其御論之通塞により御進退を御決に相成可然」(『再夢紀事』、日本史籍協會、一九二二年、一三七頁)とする説得に應じて總裁職への就任を決意したとされる。これより春嶽は、慶喜とともに幕政改革を推し進めていくこととなる。

1 幕政改革の大綱

さて幕政改革の大綱は、小楠が起草し、七月九日に幕府に建議された「國是七條」によつて次のように示されている。

大將軍上洛し列世の無禮を謝せ／諸侯の參勤を止め述職と爲せ
諸侯の室家を歸せ／外様譜代を限らず賢を撰び政官と爲せ
大いに言路を開き天下と公共の政を爲せ／海軍を興し兵威を強めよ／相對交易を止め官交易と爲せ(原漢文、『遺稿篇』、九七頁—九八頁)

これは、幕府の獨裁體制を改めて、諸藩の財政に加重な負擔を強いる參勤交代制度を緩和し、諸藩・有志の意見を幕政に反映させ、近代的な海軍を創設すること政治改革の指針としたものである。

2 「國是七條」と「國是三論」に見える改革理念

小楠は、萬延元年（一八六〇）、福井藩の藩政改革の指針として「國是三論」を著したが、その中で「先ず假に一國上に就て説き起すべけれ共、擴充せば天下に及ぶべきを知るべし」（『遺稿篇』三三二頁）と述べている。そこには、一國を超えて天下の政治に繋がるような現状認識と經世論が示されており、それが「國是七條」という幕政改革の大綱の中に生かされたと考えられる。

さて「國是三論」において小楠は、従來の幕府政治のあり方を次のように批判している。

幕府の諸侯を待つ國初の制度、其の兵力を殺ん事を慾するによりて、參勤交代を初め（中略）近年に至つては、邊警の防守等最も勞役を極めて、各國の疲弊民庶に被る事を顧ず、又金銀貨幣の事より諸般の制度、天下に布告施行する所、霸府の權柄により徳川御一家の便利私營にして絶て天下を安んじ庶民を子とするの政教あることなし。彼理が無政事といへるも是に然り。

『遺稿篇』三九頁

小楠は、西洋知識を受容する中で、西洋諸國は科學や軍事のみならず、政治・文化・教育などの各部門において、「政教悉く倫理によつて生民の爲にするに急ならざるはなし。殆ど三代の治教に符合するに至る」（同前、四〇頁）と認識するようになった。その歐米に比して、今の幕府の政治體制は、もはや小楠の思想とは相容れな

いものとされたと思われる。また春嶽も幕府の獨裁専決が「私政」であり、反対意見を壓殺する姿勢が「非政」であると主張した。中根雪江によれば、春嶽は幕府御用部屋の中等に對して「従前は國初已來天下の威權を擧げて徳川家の幕府に歸せられたる御私を被棄、御非政を改められ、天下と共に天下を治められ候より外は有之間敷」（前掲、一四一頁）と論じたところがあるが、これも小楠の意見をふまえたものと見られる。

（二）議會構想と海軍創設

次に小楠が着目したと考えられる西洋諸國の諸制度のうちから、特にイギリスの議會制度と海軍力の現状に關するの記述を取り上げ、小楠の經世論との關わりについて考察する。

1 議會制度への關心

小楠は「國是三論」の中で、「英吉利に有つては政體一に民情に本づき、官の行ふ處は大小となく必ず悉く民に議り、其の便とする處に隨て其好まざる處を強ひず」（『遺稿篇』一、四〇頁）と述べ、イギリスが民意を第一に尊重する政體であると解している。

ここで春嶽が文久二年、政事總裁就任前後に著したとされる「虎豹變革備考」（松平春嶽全集編纂刊行會『松平春嶽全集』第二卷所收、一九四一年、九二—一〇〇頁）という、公にされることになかった論策について觸れてみたい。その中に次のような一節がある。

天下公共之論を議してこれを用るには、巴力門、高門士則ち上院下院之擧なくんばあるべからず。（中略）西洋諸州之史をみるに、ハルリモン、コンモンズありて、國中之政事を公共之論

議に登せ、これを賞罰黜陟せしめ、與奪といへども又然り。英の王も佛の帝といへども、これを自由にする事を得ず、今、皇朝之制度も一變革して、巴力門を江戸に、高門士を江戸に創建し、此巴力門は幕府の臣下又は諸侯の内なるべく、高門士は諸藩士の有名之者也。又ハ巴力門を諸侯の藩士に命じ、高門士は百姓町人、又ハ庶人を加ふるも一法なるべし（前掲、九九頁）
 巴力門と高門士は、それぞれイギリス議會における上院と下院を指していると考えられる。これを見れば、春嶽が西洋の議會制度、ことにイギリスの議會制度に竝々ならぬ關心を持ち、日本にもそれを採用したいと考えていたことが窺える。

2 『大英國志』の受容

ところで春嶽は、イギリスの議會制度に関する知識をいかなる書物から得たのであろうか。

吉田寅は「幕末期においては、開明的な思想を持つ有力諸侯も、海外事情の攝取には重大な關心を持ち、これらの中國語著作を閱讀したことは注目すべきことである。筆者（吉田寅）所藏の『大英國志』は福井藩主であった松平慶永（春嶽）の手澤本であるが、所々に閲讀の際における感慨ともいへべき評語が書き込まれている」と述べている。ここから吉田所藏の『大英國志』がその書物にあたることがわかる。

春嶽が讀んだ『大英國志』⁽¹⁾は、イギリス人宣教師ウイリアム・ミュアヘッド（漢名慕維廉、一八二二—一九〇〇）が著した『大英國志』江蘇松江上海墨海書院刊、一八五六年、全八卷）である。もともとトーマス・ミルナーの英國史をミュアヘッドが漢譯したもので、一巻か

ら七卷までは、イギリスの開國起原からヴィクトリア朝に至る通史、八卷は中國史の例にならない「職制」「刑法」「教會」「財賦」「學校」「兵」「農商」「地理」の八志を略述している。その「職制」の章を見ると、イギリス議會について、次のような説明がなされている。

凡そ制度刑罰は、悉く巴力門議會に由りて定まる。民間は自ら此の會を立てて、以て國政を増修す。君位は世に傳へ、男女皆嗣立することを得。惟位に即く時は、當に手を以て教書を按じて誓ひて、政を爲すは必ず舊章に由り、教法は必ず波羅特士^(Puritans)に従ふなりと曰ふべし。巴力門は上下兩院集議す。上院は勞爾德士^(Lords)、一名比爾士^(Peers)と曰ひ、下院は高門士^(Gentry)と曰ふ。（原漢文）

これを見るとイギリス議會が、アメリカやフランスの共和制の下にある議會とは異なり、君主制の下にあることが説明されている。春嶽は、その「虎豹變革備考」の中で「朝廷より天下の政事を幕府に委任し、朝命を奉じて古來の制度を改むることなきときは、幕府の罪尤も重し。ここを以て天下の公共の論を求むる、巴力門・高門士の擧、なくんばあるべからざるなり」（前掲、一〇〇頁）と述べているが、これはイギリスの議會主義を外見的に捉えた結果、あくまで朝廷から政權を委任された幕府が中心となる議會制度を想定しているように思われる。

さて小楠は、『國是三論』の中で、イギリスでは「官の行ふ處は大小となく必ず悉く民に議り」と述べたが、さらに「出戎出好も亦然り。仍之魯と戦ひ清と戦ふ兵革數年、死傷無數、計費幾萬は皆是を民に取れども、一人の怨嗟あることなし」と解している。「魯と戦ひ」とはクリミア戦争（一八五三—一八五六）を指し、「清と戦ふ」はアヘン戦争（一八四〇—一八四二）を指していると推測できる。

小楠の論として注目すべきは、イギリスでは、何事も政府は民の議を経て行うので、たとい戦争が数年に及び、多数の死傷者と幾萬の國費を費やしたとしても、民からは政府を怨む聲は上がらないと理解している点であろう。ここで『大英國史』の「財政志略」の章を見てみると、冒頭に「大英財賦の用は、關稅地租及び國債に出づ。均しく巴力門の議に由り納む。國家の緩急を視て輕重と爲し、定額有ること無し」（原漢文）とあり、以下、主年ごとの稅收・國債の額・支出等の數字が列擧されている。たとえば一八五一年の計を見ると「國債之息二千八百四十八萬、政教官辨養老贍疾之費三十九萬六千、各衙門祿俸一百九萬、「地方有司無祿者多」兵餉六百四十萬、兵船錢糧六百四十三萬、礮位錢糧二百五十五萬、太學及諸公會書院三百五十萬云々」の記述が見える。小楠はイギリスの國家財政と議會との關係に着目したようである。

3 イギリス海軍への關心

すでに見たように、小楠が幕政改革の大綱として建議した「國是七條」には「海軍を興し兵威を強めよ」との一箇條がある。小楠は四海を海に圍まれた日本では海軍力の整備が必須であるとし、「國是三論」において次のように述べている。

今となりては日本列島譬へば大船の如し。四海は陸の如し。我陸を守るに處なし。彼は利を見て進み不利を知て退く。（中略）江府の如きは數日を出ずして飢餓に至るべし。是等淺近の數件によつて考察すとも陸軍の用なくして海軍の興さずんばあるべからざるを知るべし。（『遺稿篇』、四五頁）

なおこれにつづけて小楠は、イギリスにおける海軍力の現状に

ついて、『大英國志』の「兵志略」から「禦外侮治屬地、不得不籍兵力以壯國威。（中略）大英兵船最爲著名。一千八百四十八年兵船六百七十三號・常用者四百二十號・火輪船亦在其數。礮一萬五千位・水手二萬九千五百人・駐防水陸軍士一萬三千五百人將校九百人。與法蘭西戰時兵船一千號・水手十八萬四千人。至今日而火輪兵船計七百號餘甚多云々」（同前、四六頁）と長文を引用している。從來、この引用文については、「以下の引用文は英國の軍備について述べたものであるが、出典不明」（『日本思想體系』55、岩波書店、一九七一年、四五四頁）、または「これらの數字が何によつているのかも、數字相互間の關係も殘念ながら不明」（『日本の名著』30、一九七〇年、中央公論社、五二二頁）とされていたが、右により『大英國志』の記事からの引用であることがわかる。

幕政改革を海軍創設の觀點から見れば、それには莫大な財政と人的資源を必要とするだけに、舊來の幕府政治では實行不可能である。小楠は『大英國志』を讀んで、イギリスにおける議會・財政・軍事の關係について認識を深くし、それが「國是三論」と「國是七條」の内容に反映されていると考えられる。

おわりに

文久二年（一八六二）七月に始まった文久の幕政改革は、長州藩の唱える過激な攘夷主義への對應をめぐって、春嶽と慶喜及び幕閣との意見が對立し、文久三年（一八六三）三月、春嶽は政事總裁を辭した。辭任の背景としては、幕府の獨裁を改め、諸藩の輿論を幕政に反映させようと主張する春嶽と、幕府權力の維持強化を意圖す

る慶喜とでは、意見の一致が困難であったことが挙げられる。

また小楠も、文久二年（一八六二）十二月、宴席で刺客に襲われ逃亡したとの理由から、同月江戸を立てて福井に退去した。小楠は、翌年、熊本に歸って土籍剝奪の處分を受けている。

本稿では、海外知識の受容が小楠の經世思想に如何なる影響を與えたかについて、小楠の論策と書簡をもとに考察した。

はじめ『鎖國論』を読んだ小楠は、ケンペルの鎖國肯定論を受容しながら、西洋と日本との間には、それぞれ独自の道が存在していることを認め、そして「夷虜應接大意」においては、萬國に通用する普遍的な道の存在を主張するようになった。それは鎖國攘夷主義から開國主義への轉換の糸口となったといえよう。

さらに小楠は經世済民の仁政觀を基に『海國圖志』や『大英國志』等の讀解を通し、西洋社會の優れた諸制度の背景にある思想を吸収して、自らの經世思想を深めていった。文久の幕政改革は、まさに小楠の深化した經世思想を實踐する場であったと考えられる。

特に『大英國志』からイギリスの議會制度や海軍力の現状を學んだ意義は大きい。小楠と春嶽が舊來の幕府獨裁から「公共の政」への轉換と海軍創設の必要性を提唱したことは、文久の幕政改革の成否は別として、幕末から明治維新へと續く政治過程の中で重要な意味を持ったといえよう。

なお議會制度に關していえば、小楠も春嶽も、議會を人材登用の手段であるとの觀點から理解したため、行政と立法の分立、投票による代表者の選舉という西歐の議會制度本來の考え方に至っていない。しかし海外知識を武器に、幕藩體制が内藏する矛盾や問題點をとらえ、そこから政治改革の理念を構想しようとしたことは評價で

きるといえる。

最後に、小楠のキリスト教知識の受容に關聯して一點觸れておきたい。

『大英國志』の著者ミュアヘッドは、イギリス人宣教師として、主に上海で布教活動をしながら、キリスト教の傳道書や西洋の地理・歴史に關する多數の漢譯書を中國に紹介した人物である。小楠は、「沼山對話」のキリスト教を論じた箇所において「唐土に參り著述など致候ボイレン等も皆西教を奉候ものに有之候。右ボイレンが説に、其の一を擧て申候はば云々」として、人間の五官と心に關する「ボイレン」の説に觸れている（『遺稿篇』九〇〇―九〇一頁）。「ボイレン」は、ミュアヘッドの漢名「慕維廉」である。この「沼山對話」の記述から、小楠がミュアヘッドのキリスト教關係の著作を讀んでいた可能性が成り立つと思われるが、ここではそれを指摘するに止める¹³。

参考文献

本稿の執筆にあたり参考とした諸文献については、本文中に引用したものの他に、次の著書・論文がある。

浅井清『明治立憲思想に於ける英國議會制度の影響』（巖松堂書店、一九三五年）

魏源『海國圖志』四卷及び五卷（臺灣成文社、一九六七年）

田中彰・宮地正人『日本近代思想大系13 歴史認識』岩波書店、一九九一年）

三上一夫『幕末維新と松平春嶽』（吉川弘文館、二〇〇四年）

前田勉『江戸後期の思想空間』（ベリかん社、二〇〇九年）

野口宗親『横井小楠漢詩文全釋』（熊本出版文化會館、二〇一一年）

注

- (1) 『鎖國論』は、本文のほか志筑による注釋と附記により構成されている。『志筑の注釋と附記』は、『鎖國論』全體の四分の一を占める。大島明秀は「これらはケンペルの觀察に對する補足説明や誤りの訂正が多くを占めるが、時折志筑自身の價值基準（西洋への反感・嫌惡）から發せられたものも認められる」（『近世後期日本における志筑忠雄『鎖國論』の受容』、洋學史學會『洋學』十四號、二〇〇六年、五頁）としている。
- (2) 國書刊行會編『文明源流叢書第三』所收、名著刊行會、一九六九年。
- (3) 開國百年記念文化事業會編『鎖國時代日本人の海外知識—世界地理・西洋史に關する文獻解題—』、原書房、一九七八年、一四三—一五三頁。
- (4) 本稿では、早稲田大學古典籍總合データベースを利用した。
- (5) 横井時雄編『小楠遺稿』（民友社、一八八九年、一五七頁）には「神道」とある。『遺稿篇』で伏字にされたのは、それが編まれた昭和十三年（一九三八年）當時の時代状況を反映して、神道批判にあたる表現を隠したものと考えられる。
- (6) 箕作省吾著『坤輿圖識補』。幕末の世界地理書。正編五卷三冊は、弘化二年（一八四五）刊。補編四卷四冊は、同三年（一八四六）刊。本稿では、早稲田大學古典籍總合データベースを利用した。
- (7) 山村昌永著『訂正増譯采覽異言』。江戸時代後期の世界地理書。本書は、山村が新井白石の『采覽異言』を改訂増補する目的で、享和二年（一八〇二）、和漢洋書約一〇二種をもとに著した。本稿では、早稲田大學古典籍總合データベースを利用した。
- (8) 小楠の「田中虎六爲吾作四時軒記。賦七古一篇爲謝」という漢詩に「君聞かずや洋夷各國の治術明らかに、勵精能く通ず上下の情。公に人材を撰び俊傑擧げられ、事有らば衆に詢り國論平らぐ。薄く稅斂を征りて民貧しからず、厚く錢糧を貯へて勁兵を養ふ」と（『遺稿篇』、八七九頁）という一節がある。
- (9) ピョートル時代における東洋關係の文獻収集について、ロシアの研究者 I・F・ポポワは、『彼の治世において、中国語、滿洲語、日本語、モンゴル語、チベット語の著作の収集が始められ、その他のイスラームの稀觀書、またおそらくはイスラーム貨幣の収集についても同様であった』と考えられている。ピョートルの膨大なコレクシヨンの保管のために、『図書館』とクンストカメラが一七一四年に設立された。一七二〇年には帝室圖書館は一万五千冊の蔵書を数えていた（『ロシア科學アカデミー東洋學研究所サンクト・ペテルブルク支部の東洋寫本コレクシヨン』、『東京大學史料編纂所研究紀要』第十八号、二〇〇八年、四八頁）と述べている。
- (10) 吉田寅編『十九世紀中國・日本における海外事情攝取の諸資料—「聯邦志略」「地理全志」「大英國志」の資料的考察—』、立正大學東洋史研究資料 VI、一九九五年、三一—三二頁。以下『吉田資料』と略す。
- (11) 春嶽が讀んだ『大英國史』は、中國からの舶載本であるが、文久元年（一八六一）、長州藩が幕府の許可を得て、『大英國志』を翻譯し、書名を『英國志』と改めて刊行している。本稿では、早稲田大學古典籍總合データベースにある長州版『英國史』を利用した。吉田寅によれば、長州版『英國史』の序では、キリスト教宣傳的文章を削除しているが、『教會志略』は、イギリスにおけるキリスト教の歴史や當時の概況について解説した文章であるが、日本版においては削除の対象となっていない（『吉田資料』、一〇七頁）とある。なお小楠の「國是三論」は、萬延元年（一八六〇）の執筆である。長州藩版『英國史』は、右に記したように文久元年（一八六一）の出版であるから、小楠が讀んだ版も春嶽と同じ舶載本であった可能性が大きい。
- (12) 元治元年（一八六四）、熊本藩校時習館の居寮生であった井上毅（一八四四—一八九五）が小楠と交わした問答を筆録したものである

『遺稿篇』、八九七—九一三頁)。

(13) 八耳俊文 『格物窮理問答』の成立と本文」(『青山学院女子短期大学総合文化研究所年報』九号、二〇〇一年、一二七—一四四頁) は、ミユアヘッド(漢名、慕維廉) 漢訳の『格物窮理問答』を取り上げた論文である。附録として八耳が翻刻した『格物窮理問答』の原文が紹介されている。『格物窮理問答』について八耳は、「本文は全二十三章構成で、學生と先生の問答形式により自然のしくみが西洋科學の知識から説明されている。質問するのが學生で、答えるのが先生である」としている。その中に人體構造と靈魂との関係についての記述があり、「學生問、世間上帝所造之物孰爲貴重。先生答、惟有靈之人」として、神が造った物の中で靈有る人間が最も貴重な存在であると説かれ、また「問、頭比身硬何故。答、頭乃居靈之所故有硬骨保護」として、靈が宿るところは人間の頭部であると説明されている。